

第4章

外部団体による強力な支援

発災後、試行錯誤する我々の活動を勇気づけてくれたのが、全国社会福祉協議会から派遣されたブロック派遣職員ならびに、近隣社協からの応援である。また、大学生協に属する学生がボランティアを組織し、継続的に参加されたことも大いなる力となった。

- 4.1 社会福祉協議会派遣職員による強力な支援
- 4.2 全国大学生協ボランティアセンターからの支援報告

4.1 社会福祉協議会派遣職員による強力な支援

4.1.1 強力な助っ人・ブロック派遣職員

1. 中国・四国ブロック派遣社協職員の活動

平成 23 (2011) 年 3 月 18 日より、ブロック派遣 (*1) として全国の社会福祉協議会 (以降、社協) から職員を派遣していただくことになった。活動前に七ヶ浜の光景を眼前にして派遣職員の方々は、メディア等で見る以上に被害が大きいことに愕然とした、とのことだった。被害の大きさを報告しようにも表現できる言葉が見当たらず、写真を撮ってはみたものの、はたして写真でこの凄惨な状況を伝えきれるのかどうか、まったく自信が持てない、そう思ったほど大きな衝撃だったという。

近隣の宿泊施設も営業していなかったことから、応援派遣職員は七ヶ浜社協で寝食をともにすることになった。その結果、周囲との絆も深めていただけたようだ。

3 月 31 日より、派遣社協職員は 2 名体制となり、特例緊急小口資金貸付 (*2) 支援に 1 名、災害ボランティアセンターに 1 名の配置とし、活動していただいた。

特例緊急小口資金の貸付支援については、大勢の被災者住民の方が七ヶ浜社協に押し寄せたが、資金担当経験者が多く、丁寧・かつ迅速に対応していただいたこともあり、混乱もなく手際よく対応していただいた。

また、手探りで開所した災害ボランティアセンターだったこともあり、日々悪戦苦闘していたが、ニーズ調査・避難所支援団体の調整・マッチング・ときには水汲みまでもしていただき、災害ボランティアセンターのスタッフとして活動していただいた。

震災当初、水道復旧の目途がたたなかったこともあり、七ヶ浜には炊き出し等の支援が少なかった。派遣社協職員の方はそれを見かねて、知り合いの団体に呼びかけ、七ヶ浜での炊き出しを実施していただいた。また、ミーティングの時などには派遣職員・近隣市町村社協職員の方からの的確なアドバイスをいただき、災害ボランティアセンターを円滑に運営することができたことに、ブロック派遣職員の大きな力を感じさせられた。

最後に、ある派遣社協職員の方より次のような非常に印象に残る言葉をいただいたことを記しておきたい。

「東北の人達はいいい意味でも、悪い意味でも我慢強い・忍耐強い。もっと我慢せずにこのような状況下で自分を出してもいいと思う……。もし、西日本で同じような規模の災害が起きてしまったら、おそらく自分を押し殺すようなことはしない。そこが東北人の奥ゆかしいところだ。」

平成 23 (2011) 年 3 月 18 日から 7 月 19 日まで、中国・四国の社会福祉協議会職員計 34 名が七ヶ浜社会福祉協議会に派遣され、七ヶ浜復興のために御尽力いただきました。ここに、深く感謝申し上げます。なお、派遣職員の一覧は資料編に掲載しています。

＜七ヶ浜町社会福祉協議会 小野 哲 菊地 顕緩＞

《トピックス》 ブロック派遣職員からのメッセージ

近畿ブロック+中国・四国ブロック指定社協派遣

山口県萩市 山本真琴 様より (第24クール・平成23年7月4日～7月12日)

夏は、私にとって特別な季節なのかもしれません。七ヶ浜の皆さんと出会ったのは平成23年の夏。私の住む地域で、初めてボランティアセンターが立ち上がったのは平成25年の夏でした。私がこの山口豪雨をたくさんのボランティアさんとともに乗り切ることができたのも、七ヶ浜での経験があったからだと強く感じています。



山本真琴さん(前列左から2人目)とボランティアセンターのスタッフ

七ヶ浜のためと思いながら活動した十日間でしたが、そこでたくさんのノウハウ、そして、ボランティアセンターの在り方を学ぶことができたのだと改めて感じました。また、復旧が遅々として進まなかったときに届いた七ヶ浜の皆さんからのメッセージ。どれほど勇気づけられたことでしょうか。私たちはずっとつながっているんだと心から嬉しく思いました。

ボランティアセンターには、その地域の色が現れると思います。七ヶ浜は、今の私が大切にしている「縁(えにし)色」だったように思います。人が人を支えることの素晴らしさ、人が人を敬うことの大切さ、人として生き方の原点が七ヶ浜にはたくさんあり、その一つ一つがいろんな色を持って光り、そして、皆が一つになって一段と力強く光輝いていました。そんな「縁色」に私は惹かれてしまうのです。

また、ふらっとおじゃましたいな七ヶ浜。

*1 「ブロック派遣」

全国を北海道・東北、関東・甲信越、東海・北陸、近畿、中国・四国、九州の6つにわけ、各々を“ブロック”と呼んでいる。東日本大震災が発災し宮城県社会福祉協議会から全国社会福祉協議会へと応援要請を行った。要請を受けた全国社会福祉協議会は、全国の都道府県社協に呼びかけ、職員を被災地社協に派遣した。宮城県社会福祉協議会には、近畿ブロック・中国・四国ブロックからの職員の派遣応援があり、七ヶ浜社協には大阪、京都、鳥取、島根、山口県より職員が派遣された。

*2 「特例緊急小口資金貸付」

通常は、低所得者世帯に当座の生活費の貸付を行う緊急小口資金だが、東日本大震災の被害の甚大さに鑑み、被災世帯もその貸付対象に含める等の特例措置を講じた。

4.1.2 近隣の社会福祉協議会からの派遣支援

1. 利府町社会福祉協議会・千葉祐輔氏に聞く

平成 23（2011）年 4 月 2 日から、富谷町社会福祉協議会の局長を皮切りに、毎日 2 名体制で七ヶ浜町災害ボランティアセンターへ社協職員が支援に訪れました。それ以前にも個人単位でお手伝いいただいていたのですが、正式に、とくに被害の大きかった多賀城市、塩釜市、七ヶ浜町の災害ボランティアセンターの支援に来ていただけることになりました。

その時の様子を利府町社協の千葉祐輔氏にうかがいました。



利府町社協事務所でインタビューを受ける千葉さん
(2013 年 4 月)

Q. 派遣をしなければいけないと思ったのはどんなきっかけからでしたか？

千葉氏

……宮城県社協から仙塩ブロック派遣の幹事役の依頼があったので引き受けました。そこで、“利府町社協がやらねば、誰がやる。”と思いました。

……甚大な被害を受けた沿岸地域社協への支援については、震災当初から必要性を感じていました。派遣支援の根拠として、仙台都市圏域等市町社協の相互支援協定がありますが、宮城県内の全市町村が災害救助法の適用市町村となっている現状を考えれば、協定の通り派遣調整することは、

現実問題として不可能であることは周知の事実でした。さりとて、社協有志による半ばボランティアのような体制では限界があるので、新たな支援の仕組みを構築しなければいけないと考えていました。そこで、宮城県社協の依頼を受けました。



朝の全体朝礼で紹介される近隣社協の職員

Q. 近隣社協を招集し、支援方法についてどのように話し合われましたか？

千葉氏

……宮城郡・黒川郡の社協へ呼びかけし、利府町社協事務所へ集合していただき、担当職員が支援について話し合いました。

……当時、まず利府町社協に集合していただき、①お互いの顔を見る ②それぞれが知っている情報を交換する ③今後の課題、取り組みについて共有化を図る ④社協職員たちの熱き思いを確認する ④派遣スケジュールの調整の仕組みをみんなで考える ということを行いました。

Q. 派遣を各社協に了承していただくために、どのような手続きをとられましたか？

千葉氏

……職員派遣の協力について、まずは各事務局長へ説明し、文書、FAXにて依頼しました。スケジュール案に基づき、個別の調整を図りながら決定して手続きしました。みなさんとても協力的でした。

Q. 実際に派遣がスタートして、現場で苦労した話などがありますか？

千葉氏

……被災地社協（災害ボランティアセンター）が望んでいる支援に対して、“状況を察しながら、どこまで希望に沿う派遣調整ができるか”ということが苦労した点でした。

……支援に入る職員もまずは、地元社協で業務の調整をしながら、中期的なスケジュールのもと、派遣OKとなるので、それぞれの社協の事情も察しなければならない。双方の事情と現状を踏まえてマッチングするのは難しかったです。また、県社協が指定したエリア外ではありますが、同じ仙台地方管内社協の仲間である、亘理町社協や山元町社協にも派遣しました。

Q. 派遣を終了するときの判断のきっかけなどありましたか？

千葉氏

……派遣終了のタイミングについては、派遣職員を中心として話し合い、決めました。被災地社協のニーズのある・なしが一番の判断材料とはなりますが、社協職員がスタッフとして現地で担当しなければいけない業務があるかどうか判断のきっかけとなりました。それぞれの社協にしながらもできること、必要に応じて対応が可能であれば、その時が派遣終了の目安となりました。

Q. その他、感想などがございましたらお願いいたします。

千葉氏

……七ヶ浜町社協の皆様は、想像以上の長期戦を戦い続けています。その中において、これまでの地域福祉の取り組みについて、改めて考えさせられたことも多々あるかと存じます。（私自身、考えることが多々ありましたので。）この経験を糧に、これから未来へ向かって新しくパワーアップした七ヶ浜町になるよう、また、七ヶ浜町社協が福祉の分野において、必ずや町民の期待に応え、重要な役割を担うことができることを確信しております。

《トピックス》 近隣社協派遣職員からのメッセージ ①

・日常のつながりが非日常を支える ～七ヶ浜での活動を振り返って

震災発生後、私は地元大和町での被災者支援活動に従事すると同時に、4月から沿岸部の多賀城市災害ボランティアセンターの支援、4月末には七ヶ浜町災害ボランティアセンターの支援に入りました。七ヶ浜町社協のスタッフ、県内外からの支援スタッフ、地元や学生による生え抜きボランティア、熱い思いを抱いて県外から入ってくるボランティアなど、人に触れ、思いに触れるとエネルギーが湧いてくると感じる毎日でした。

当時抱いていた危惧は、使命感を持って奮闘し続ける七ヶ浜町社協のスタッフが、心身ともに疲弊、あるいは燃え尽きて、ある時バツタリ倒れてしまうのではないかとということでした。実際、災害ボランティアセンターの現場は、毎日たくさんの問題と摩擦が生まれ、今後が見通しにくい状態が続いており、最終的にはそれらの判断や責任の全てが社協スタッフに集約されるという辛さがありました。私は、七ヶ浜町社協のスタッフと公私ともに長く親しくさせていただいていた間柄であったため、自分が現場に入ること、スタッフや関係者間のクッションとなったり、悩み事の相談相手になったり、視野を広げる助言などが少しでもできればいいなと考えていました。過ごした時間は決して長くはありませんでしたが、沿岸部の社協職員の連携を導くためのプロジェクトを企画したり、ボランティアセンター内に資材班を整備したり、被災者ニーズの把握のためのローラー作戦をボランティアさんとおこなったりといった取り組みを、微力ながら進めさせていただきました。

緊迫した現場の中で、時には意見がぶつかることもありました。しかし、普段からの信頼関係があったからこそ深いところまで突っ込んだやり取りや即断即決ができた、振り返って思います。七ヶ浜町の皆さんにとって、自分がどれだけ支えとなれたかはわかりませんが、“日常のつながりこそが非日常の支えになる”と体験を通して感じました。

震災から2年半が経つ今、七ヶ浜町社協のスタッフとの友情は以前より深く、また、七ヶ浜町で新たに結ばれた縁は今も続いています。“絆”などと肩に力を入れずとも、これからも被災地に思いを寄せるものの一人として、日常のつながりを積み重ねることで携わっていきたいと思います。

竹内倫明（元大和町社会福祉協議会職員）

《トピックス》 近隣社協派遣職員からのメッセージ ②

・復興へ続く次の一步を踏み出す支え

私は、5月末～6月にかけて、災害ボランティアセンターの本部の支援をさせていただきました。支援に入る前から私は、「自分たちはどういった役割を担えばいいのか」ということを常に考え、それが皆で共有されていることが大切だと思っていました。対応に追われる地元社協の職員に寄り添い、時には気づいたことを進言もしました。災害ボランティアセンターの日々の業務自体は、実際に経験を積むことによって誰にでも担えることがいくつかあります。長期で関われるボランティアさんを見つけ、思い切って役割を委譲していくことでマンパワーを確保できます。まさにコーディネート醍醐味です。

ただ、「復旧」から「復興」へ続く長い道筋を、住民の皆さんに寄り添って一緒に考え、行動していく（いける）のは、私を含めた外部から来た支援者達ではなく、住民の皆さんとそれを支える地元の支援者の皆さんです。私たちができることは、七ヶ浜町社協の方の意見や話を顔の見える存在として聞き、寄り添い、時には意見を言うことです。それは私たち近隣社協の常日頃からのつながりがあればこそできたことだと思います。

激務の中で自分を見失いがちになりそうな状況の中、“被災者支援の中核である支援者”の支援をおろそかにせずに行うことが、復興へ続く次の一步を踏み出す支えになると私は思っています。

大塚 潮（大郷町社会福祉協議会）

4.2 全国大学生協ボランティアセンターからの支援報告

4.2.1 支援に至る経緯

全国大学生協生活協同組合連合会(以下、大学生協連)では、東日本大震災直後の午後4時に震災対策本部を設置し、現地の情報収集に努め、翌週15日に生協職員の藤江正俊(当時、神戸ブロック事務局長)と学生の小島憂也(当時、大学生協連理事)を派遣することを決定した。先遣隊の2人は宮城県社会福祉協議会が設置する県の災害ボランティアセンターと連絡を取り、宮城県内の情報収集を進めた。その結果、「復興にはかなりの時間と人手が必要であり、体力と時間に比較적余裕がある大学生の力は欠かせないだろう」という判断のもと、“大学生協ボランティアセンター(以下、大学生協VC)”を立ち上げることを決めた。当時、団体ボランティアの受け入れが困難な中、七ヶ浜町災害ボランティアセンター(以下、七ヶ浜VC)を紹介いただき、平成23(2011)年4月18日より1ターム(回)4泊5日のボランティア活動を開始した。講義の開始が遅れた東京近郊の大学生を中心に18名の応募があった。



児島センター長(中央)を中心とした1ターム(第1陣)の面々

4.2.2 大学生協と七ヶ浜町

七ヶ浜町VCの星真由美コーディネーターに対応いただき、当初、任された作業内容は「避難所支援活動」「泥の撤去」「ニーズ調査」「ボランティアセンターブログ」「資材・物資管理」である。避難所支援活動では、中央公民館避難所と国際村避難所の2箇所を担当し、物資運搬や清掃、炊き出しの手伝いや子どもの遊び相手などを行った。大学生が自ら考えたクイズ大会なども催した。ニーズ調査では、町内9地区の1,000軒以上のお宅を一軒ずつ訪問し、困っていることがないかの聞き取りを行った。幸いにも津波で家を流されなかった方々の中には、かえって救援物資が届かず困っておられる方も見受けられた。ボランティアセンターブログでは、県外の方にボランティアニーズを知らせる第一歩であり、パソコンに強い大学生に依頼があった。資材・物資管理では、全国から届けられた救援物資を整理し、フリーマーケットを開き、直接町民の方々の手に物資が渡るようなお手伝いや、ボランティア作業に必要な道具を管理しやすいように整理をした。



星コーディネーターよりセンター内の説明を受ける。

活動開始当初、ボランティア活動参加者はもちろん、大学生協VCを運営する事務局員は何もかもが初めてのことだった。当時大学生をまとめる役目を担っていた、大学生協VC初

代センター長の小島は、当時を振り返り、「時には進まない復興に苛立ち、ボランティア参加者同士で大激論になったこともあった。本当に自分たちは役に立っているのか?と自問自答しながら、それでも支援する側が焦ってはいけないんだ」と感じ、大学生に話した。



活動が終わり宿舎に戻ってからも会議は遅くまで続いた。

4.2.3 セツ浜との厚い信頼関係

4月から1か月間に渡って行った活動も、ゴールデンウィークが明け、各大学の講義も再開されたため、一旦活動を終了した。その後週末を利用し、東松島市での活動を行ったが、夏季休暇を目前に、これまで参加した大学生から「今後はもう活動をしないのか?」「またセツ浜に行きたい!」「まだニーズがあるのなら是非参加したい!」などの声が多数寄せられた。小島からバトンを受け取った、



センタースタッフとして中心的役割を果たす学生。

大学生協 VC2 代目センター長の富川竜生(当時、大学生協連執行役員)は星さんと活動内容を調整し、再び1ヶ月間に及ぶ活動を開始するに至った。大学生協 VC の活動スタイルは、1ターム4泊5日を基本とし、約40名の大学生が5ターム入れ替わりで参加する。その活動スタイルがあつてか、セツ浜災害 VC から、センターの運営スタッフやデータ管理などのボランティアセンターの運営を任された。セツ浜 VC スタッフの方々とともに、ボランティアセンターにかかってくる電話の応対・受付、センター内やトイレの清掃などの環境整備、ボランティアを派遣する前の現地調査などを行った。その他にも「海浜清掃」や「仮設住宅集会所待機ボランティア」などの活動を行い、3日間活動を行った大学生自身は、次のタームで来る大学生に直接宿舎で活動の引き継ぎを行った。

当時、震災から半年以上の時間が経過し、震災直後と比べるとセンター内の切迫感や緊張感は和らいでいたように思う。そのためか、旅行気分に参加しているような大学生もあり、現地のボランティアリーダーからお叱りを受けてしまったこともある。時間は経っても、ボランティアで参加することの心構えや態度に関しては、注意しなければならないと感じた。

その中でも、星さんから「大学生協はすっかりセツ浜にとってなくてはならない立場の団体になっています。」と言われたことは、大学生協 VC 一同が本当に嬉しく思いました。また、この夏季タームをもって大学生協 VC は一時収束しようとしていたため、セツ浜 VC の皆様から「また来てね」と声をかけられたのは忘れられないでき事です。



2代目センター長の富川が「セツ浜にまた来ます」と決意表明。

4.2.4 これからも七ヶ浜を忘れずに

平成 24 (2012) 年の 3 月に七ヶ浜 VC の名称が「浜を元気に！七ヶ浜町復興支援ボランティアセンター」へと変わり、大学生協 VC での活動を改めて考える機会があった。後述する学習支援イベントはもちろんのこと、これまで築いてきた七ヶ浜町との繋がりは絶やしたくはなく、もっと多くの大学生に、東北へ訪れる機会を設けられないかと思い、2 年目も継続して大学生協 VC の活動を行うこととなった。ここで 3 代目センター長の山崎弘純(当時、大学生協連理事)へと代替わりし、震災当初の様子を全く知らない中、大学生協 VC の運営を行った。2011 年同様、大学生の長期休暇を利用し、春季休暇・GW・夏季休暇に 1 ターム 3 泊 4 日とし、40 人の大学生を 9 ターム行った。とくに、「ニーズ調査班」を改めて立ち上げ、町民の方々へ電話をし、困っていることがないかを聞き出す活動をメインに行った。また、夏には「オープンボラセン」が決まり、準備や当日の運営をサポートすることができた。七ヶ浜 VC の雰囲気も明るくなり、遠方から来た大学生にとっては、震災の被害が実感できず「今本当に何が必要なのか」と感じる学生が多かったように感じた。「待つこともボランティア」という言葉通り、支援する側が焦っても仕方がないということを七ヶ浜 VC の方々に教えていただいた。

「ニーズ調査班」では電話をし、ボランティア活動へ伺ったお宅へ、再度訪問するという活動だったが、次第に「県外の大学生と地元住民の交流」へと変わっていったことは当時印象として残っている。とあるお宅に電話をした時、直後にご夫婦が喧嘩をしてしまったことがあった。訪問した時は口も聞かないような状態だったそうだが、訪問した立命館大学のボランティア女子学生の振る舞いがよかったのか、その後ご夫婦と 3 人で七ヶ浜 VC へと足を運んでいただき、「七ヶ浜に来たらいつでも泊まりにおいでね」と声を掛けられている姿に、大学生の元気を感しました。

4.2.5 大学生協にできる、子ども達への支援

2 代目センター長の富川は、平成 23 (2011) 年の夏季タームでは大学生協から持ち込み企画ができないかと考えた。「町の子供達と大学生が触れ合う機会を」という想いから、学習支援イベントを提案した。大学生協は、将来大学生になりたいと願う中高生の支援をしていた。「出張オープンキャンパス」と題し、主に中高生を対象にした学習支援イベントを行った。ただ、勉強をするだけではなく、小学生には「百マス計算」や「紙飛行大会」など楽しみながら交流できる機会を設け、落ち着いて勉強ができない子どもでも気軽に参加できるような工夫をした。



七ヶ浜住民との絆も深まっていた。



大学生のお兄さん、お姉さんを慕う子どもたち。

・2011年9月3・4・17・18日

持ち込み企画として初めての試みだったため、まずは町内の各学校に知らせる必要があった。しかし、初日には1名の参加だった。宿舎に戻り反省会をする中で、もっと町内の子ども達へ知らせる工夫が必要だと感じ、ポスターやビラを作成し、各学校へ出向き子ども達へ配布していただくようお願いをして回った。そして25名の子ども達と、勉強や遊びを通じて交流することができた。



学生と一緒に仮設商店街の看板作りをする子どもたち。

・2011年11月26・27日／12月17・18日

・2012年2月4・5・11・12日

町内の方や子ども達から、再び学習支援イベントを望む声が聞かれた。期末テストや入学試験に向けた勉強をメインに、夏にも参加してくれた子ども達が多く参加した。また、12月に国際村ホールで行われたクリスマスコンサートへも参加し、お手伝いさせていただいた。

・2012年3月17・18・24・25日

引き続き小・中・高校生を対象に学習支援イベントを開催した。大学生の中には塾講師や家庭教師の経験がある学生が多く参加した。3月25日には中央公民館で開催されたイベントに参加し、子ども達と触れ合うことができた。夏に参加した子ども達と大学生が再会する場面もあり、大学生協が着用しているピンク色のビブス姿も覚えられるようになった。



勉強の合間の楽しいおしゃべりタイム。

・2012年5月6日

ゴールデンウィークの最終日に学習支援イベントを実施。10回を数える学習支援イベントを行っているので、参加してくれる子ども達の数も増え、口コミで広がっていった。この頃、大学生ボランティアの中で、「どこまで勉強して、どこまで遊びにするのか」という議論が熱くなされ、時には宿泊所で喧嘩になったりもした。



回を重ねるたびに学生と子どもたちの間に信頼が生まれていった。

・2012年9月1・2・8・9日

勉強をするだけでなく、屋外で遊ぶ機会として、町内ウォークラリーイベントを企画した。七ヶ浜町内をクイズ形式で子ども達が大学生に町のことを教えながら歩く、といった内容にし、運動不足の解消にも目を向けた。

・2013年3月9・10・17日

引き続き、入試やテスト、宿題などの学習支援を実施。3月17日にスポーツイベントを実施することになった。これまで1年半に渡り、学習支援を行ってきたが、子ども達の遊び場が仮設住宅や瓦礫置き場になり、運動不足が危惧されていた。全国大学生協連の会員である東北学院大学生協に協力依頼し、多賀城市にある東北学院大学の体育館を借用し、40名の子ども達をバスで送迎し、ドッジボールやバドミントン、サッカーなど楽しんだ。



継続から生まれた再校の笑顔!!



大勢の子どもたちの参加に学生も大喜びの交流会だった。

・2013年8月5・6・7・8・9日

これまで学習支援イベントを継続して行い、町役場より小・中学校でのサマースクールを支援してほしいとお声掛けいただいた。主には不登校児童や成績不振の児童と一緒に勉強や遊びを行った。大学生も戸惑いながらではあるが、先生と協力しながら試行錯誤し、子どもたちに夢を与えることができた。

また、子育て支援センターを通じ、町内の小学校にある児童館へ伺った。できるだけ同じ人が数日間通えるようにし、朝から夕方まで子ども達と触れ合うことができた。特に男子児童にとっては思いっきり遊べる相手が出てきて喜んでくれたように感じた。



学童保育の子どもたちと思い切り遊ぶ学生。

4.2.6 これからもずっとつながり続けたい

平成 25 (2013) 年も同様に七ヶ浜町で様々な活動に関わってきた。少しでも多くの大学生が東北に来れるように、星さんと活動や日程の調整をし、これまでに約 1,000 名(延べ 2,091 名)の大学生が七ヶ浜町へ行くことができた。平成 24 年から 25 年の 2 年間大学生協 VC のセンター長を務めた山崎は、「大学生協と七ヶ浜はこれからもつながり続けてほしい。七ヶ浜 VC の節目(ボランティア座談会やメモリアルイベントなど)には何かお手伝いをさせてもらいました。それは、これまで先輩方と星さんを始めとする七ヶ浜 VC スタッフのみなさんが築き上げた賜物だと思っています。」と振り返った。平成 25 年の夏に 4 代目センター長吉岡充代子(現、大学生協連理事)に代替わりし、引き続き活動を行っていく予定です。

大学生協は全国に 210 の大学にあり、約 157 万人の組合員(学生・教職員)が加入しています。組合員の「東北の力になりたい」という気持ちを形にし、東北の復興支援のためにボランティア活動を行ってきました。今後は、学習支援イベントを中心に、これまで大学生協 VC が行ってきたノウハウと七ヶ浜 VC との関係を活かしながら、中長期的な支援活動を行います。



2011 年 9 月、夏季ボランティア終了日。ボランティアとの絆もつながり、新たなスタートとなった。

4.2.7 東北の大学生を中心に学習支援を



2012 年 9 月、夏季ボランティア学生との集合写真!! 七ヶ浜ボランティアセンターの大切なスタッフたち。

全国大学生生活協同組合連合会には全国に 9 つの支部があり、東北ブロックでは東北地方の大学生を集め、頻度を高めた学習支援を行っている。2013 年より月に 2 回のペースで行い、これまでに計 22 回の学習支援イベントを実施した。

<大学生協ボランティアセンター>

<Memo>